

研究論文

ホステスは語ることができるか？ ——「元ホステス」作家の語りと読者の受容

大江光子

1 はじめに

ホステスが「語り」の場を広げている。その場において、ホステスは、自らをホステスと名乗り、ホステスとして、ホステスについて語ってきた。出版業界においては2000年頃から、ホステスとしての私生活を綴るエッセイ本や、ホステスを営業のスペシャリストとして扱うビジネス書、ホステスによる恋愛指南書が相次いで出版されており、一種の社会現象となっている。蝶々¹(2004)の50万部を超えるベストセラー²になった恋愛論『銀座ホステス作家の実践テク147 小悪魔な女になる方法』、累計20万部を売り上げ、後にドラマ化された齊藤³(2009)の自伝書『筆談ホステス』が代表的なものとして挙げられるが、その他例を挙げると枚挙に遑がない。松田(2006a)は、「とりわけここ数年では、ホステスをコンサルタント的に扱ったビジネス書が相次いで出版」(p.31)されたと指摘しており、白坂⁴(2017)が上梓したビジネス書、『銀座の流儀「クラブ稲葉」ママの心得帖』が2018年にベストセラー⁵となったことに鑑みれば、この傾向は現在まで続いていると言ってよいだろう。また、近年テレビ・メディアにおいても、ホステスが、ホステスについて語る姿が散見される。例えば2018年4月16日にはNHK『プロフェッショナル仕事の流儀 銀座、夜の女たちスペシャル』にて、

¹ 蝶々は、元ホステス、作家、エッセイストである。コピーライター兼銀座ホステスだった2002年に『銀座小悪魔日記—元銀座ホステスの過激すぎる私生活』(東京:宙出版)でデビューした。

² 河出書新社。http://www.kawade.co.jp/np/search_result.html?writer_id=13608を参照せよ。

³ 齊藤里恵は、元ホステス、作家、政治家である。

⁴ 白坂亜紀は、1996年に銀座クラブ稲葉を開店。現在銀座でクラブ、ラウンジ、バー、日本料理店の4店舗を経営している。

⁵ 東洋経済オンラインによる『「ビジネス書」最新ベストセラーランキング』(2018年6月24日)にて36位を獲得。

クラブ稲葉のママ⁶・白坂亜紀、クラブ数寄屋橋のママ・園田静香⁷が特集され、2019年1月8日にはTBS『マツコの知らない世界』で銀座のクラブNanaeのママ・唐沢菜々江⁸がゲスト出演し話題を呼んだ。他にも、ワイドショー番組TBS『サンデー・ジャポン』においては元キャバクラ嬢の立花胡桃⁹や、現役キャバクラ嬢小川えり¹⁰がゲストとして出演しコメントを述べるなど、テレビ・メディアにおいて、ホステスの語る場は深夜番組から、ワイドショー番組、ドキュメンタリー番組へと広がりをみせている。更に、ホステス・元ホステスらは、ビジネスのスペシャリストとして接客技術や会話技術を教える講座¹¹や、商工会議所や大学において社会人向けの講演会¹²に講師として登壇し、ホステス・元ホステスとして語っている。上記メディアにおいてホステスは、一貫して「営業のスペシャリスト」「対人関係のスペシャリスト」「恋愛のスペシャリスト」として扱われてきた。

ここに幾つかの問いが浮かび上がってくる。広がり続けるホステスの「語り」の場において、ホステスとして、ホステスについて語るホステスらは、語らないホステスらを代表し、表象してきたのだろうか？ representationに関する問いである。また、それらホステスの「語り」は、読者／聴者にどのように受容されてきたのだろうか？

本稿では、それらの問いに答えるため、元ホステス作家である室井佑月が、ホステスについて書き綴った著書『ドラゴンフライ』（室井, 1999）¹³を例に挙げて

⁶ ホステスクラブの店舗責任者、女主人。経営者に雇われてママを勤める者もいれば、経営者であることもある。ホステスの統括、接客業務を主たる仕事とする。

⁷ 園田静香は、1968年銀座にクラブ数寄屋橋を開店。経営者として勤めながら、エッセイも手がける。クラブ数寄屋橋は、多くの著名な作家が通った文壇バーとして名高い。

⁸ 唐沢菜々江は2018年に銀座クラブNanaeを開店。現在銀座でワインバーとミニクラブの3店舗を経営している。

⁹ 立花胡桃は、元キャバクラ嬢、元タレント、作家である。

¹⁰ 小川えりは、出演当時、名古屋市にある繁華街錦のキャバクラ嬢であった。2019年11月にキャバクラを退職した。

¹¹ 例えば、吉武治美「元No.1ホステスが教える接客術・トーク術」、塚越友子「2時間で2回目につながる恋愛会話力UP! 講座」など。

¹² 例えば、白坂亜紀「銀座ママに学ぶ経営力、人間力」、桐島とうか「稼ぐために。そして、売れ続けるために。～銀座最年少ママの奮戦記～」など。

¹³ 室井佑月『ドラゴンフライ』は、初出、室井佑月(1999)『ドラゴンフライ』【小説すばる】13.4-1、東京：集英社；単行本、室井佑月(2001)『ドラゴンフライ』、東京：集英社；文庫本、室井佑月(2004)『ドラゴンフライ』、東京：集英社文庫、3つのバージョンがある。

考えてみたい。2000年代頃よりホステスを題材とした書籍が相次いで出版されるという社会現象が起きたことは先に述べたが、この流れの先駆けとして『ドラゴンフライ』がある。元ホステス作家・室井は、ホステスを代表／表象することはできるのだろうか？また、室井はいかにホステスを語り、そして読者は、そこに何を讀んだのだろうか？

本稿では最初に、ホステスに関する先行研究を整理し、その問題点と、本研究の意義を明らかにする。その後、語るホステスらが、語らないホステスを代表／表象しうるのかという問いについて、ガヤトリ・C・スピヴァクのサバルタン論を援用し考察を試みる。続いて『ドラゴンフライ』において、いかにホステスが語られているのかをテキスト分析によって検証し、最後に、本テキストが読者にどのように読まれたのかを、読者レビューを参照し解き明かしていく。ここでは、元ホステスという肩書きが読者の解釈に及ぼす影響について、ミシェル・フーコーの作者論を用いて考察し、室井が語るホステス像に、読者が「リアリティ」を拵えていく様子を浮かび上がらせていきたい。

なお、本稿において使用する「語り」という語は、ロラン・バルトの『物語の構造分析』を踏まえて¹⁴、語り手と聞き手／送り手と受け手のコミュニケーションの伝達物と定義する。「語り」には小説など、作者と読者の間のコミュニケーションの伝達物である小説も含む。

また、本稿では、ホステスという語を、松田（2006b）による定義「一般にバー、キャバレー、ナイトクラブ、そのほかの施設で、接客、接待することに従事する女性を指す」（p. 177）に、主たる客を男性とすることを追記した上で用いる¹⁵。

本稿においては、底本として単行本を使用した。

¹⁴ バルト（Barthes, 1966/1979）は、『物語の構造分析』において「物語はコミュニケーションの伝達物である。物語の送り手が存在し、物語の受け手が存在するのだ。周知のように、言語的コミュニケーションにおいては、わたしとあなたは、絶対に、互いに他を前提とする。同様にして、語り手と聞き手（または読み手）をもたない物語はありえない」（p. 36）と述べている。バルトは物語を送り手と受け手間のコミュニケーションの伝達物と捉え、物語の分析に「送り手」と「受け手」という概念を取り込んだ。ここで、バルトによって使用されているフランス語の“*narration*”という語が、日本において「物語行為」あるいは「語り」と訳され使用されてきた。これを踏まえて本稿で「語り」という語を使用する。

¹⁵ 松田（2006b, p. 177）が言及するように、ホステス（Hostess）の原義は女主人である。

2 ホステスに関する先行研究

これまで、ホステスという職業、水商売というフィールドに関しては、文化人類学、社会学の分野において主に参与観察という手法を用いて研究されてきた。本節では、先行研究がホステスをいかに扱ってきたのかを紹介する。

まず、日本特有の水商売の仕組みと文化的背景を、文化を異にする者の視点から明らかにした、アラン・ローゼンバーグとウィリアム・J・オニール (Rosenberg & O'Neill, 1962)、ジョン・デビッド・モーリー (Morley, 1985/1987)、ニコラス・ボーフ (Bornoff, 1991) らの旅行記的研究が挙げられる。これらの研究は、松田 (2006a) が指摘するように「ホステスクラブを日本の奇妙な『性習慣』のひとつ」(p. 48) とみなすものであり、ホステスを「性の商品化」の一つとして固定的に捉える傾向が見られる¹⁶。

また、アン・アリソンは、ホステスクラブ¹⁷を日本の企業文化の一要素と考え、ホステスと客の関係の中に日本における男女の役割を観察した (Allison, 1994)。川畑は、参与観察によって、ホステスクラブにおける女性の主体性の抑圧の過程や、ホステスと客の間の権力構造、ホステスの営業戦略を明らかにしている (川畑, 1995; 2001)。そして上瀬は、キャバクラ嬢へ付与されるスティグマを明らかにした上で、キャバクラ嬢がそのスティグマをいかに認識し、対処しているのか社会的見地から調査を行なった (上瀬, 2011; Kamise, 2013)。これらの研究においては、松田 (2006a, pp. 49-50) も指摘したように、客とホステスの関係を、男性優位な社会の中での男性客—主—加害者と、劣位に置かれた女性

福富 (1994, p. 176) によれば、日本において、バー、クラブ、キャバレーの女性従業員のことを表す「ホステス」という言葉が定着したのは、東京オリンピック前後のことである。

¹⁶ 例えばモーリー (Morley, 1985/1987) は、日本での経験を「物語ふうエッセイ」(p. 6) 形式で綴り、仕事や結婚生活という男性に緊張を強いる制度を支えるのが、緊張を解放する「調節弁」としての水商売であると結論付けた。ボーフ (Bornoff, 1991) は、ホステスを含む水商売文化と、芸者ビジネス、ソープランド、売春婦、ストリップを並列し、快樂という一つの領域の中に包括して見ている。

¹⁷ 松田 (2006a) は、ホステスクラブという用語を「ホステスが活動するのは、主にクラブやキャバクラと呼ばれる、ホステスクラブにおいてである」(p. 15) と述べ、ホステスクラブをキャバクラとクラブを含む場所を示す用語として使用している。本稿では、ホステスと呼ばれる者が働くすべての場所として再定義し、ホステスクラブという言葉を使用する。なぜなら、ホステスが働く場所や営業形態に付けられる全ての名前は把握することができないからであり、また、ホステスクラブを場所や営業形態によって明確に定義することは本稿の意に背くからである。

サービス提供者としてのホステス—従—被害者の関係として一元的に捉える傾向があった。例えば、川畑（2001）は、異性間における性暴力の発生メカニズムを明らかにすることを研究目的として、男性客からホステスへの性暴力の不可視化という問題を例に挙げて考察している。ホステスを、ジェンダーに基づいた権力関係の中に眼差すことで、「媚態」という戦略の果たした二面的な効果を示唆し、男性客とホステスの間の不均衡な関係と、巧妙に隠された抑圧を明らかにした。また上瀬（Kamise, 2013）は、性産業の中心で、スティグマ¹⁸を付与され、劣位に置かれるキャバクラ嬢の被職業スティグマ意識への対処方略を、キャバクラ嬢へのアンケート調査の結果から分析し、職業固有の対処方略と職業自尊心との関係を明らかにした。フェミニズムの観点からのこういった研究は大変重要である。しかし、客とホステスの関係を主—従、加害—被害の関係に固定し、ホステスの語りをその関係の中に還元することは、主—従、加害—被害という関係には収まらない関係を不可視化してしまう。さらに、ホステスのスティグマをさらに固定してしまうといった問題点もある。加えて、客とホステスの関係には、ジェンダーに基づいた権力関係だけでなく、ホステス間のヒエラルキー、顧客ランクなど様々な要因の影響が考えられ、一元的な権力関係の中に還元することはできない。

対照的に、ホステスという仕事の専門性を明らかにした松田（2006a）の研究は、アリソン（1994）や川畑（1995; 1998）の先行研究の問題点を指摘し、異なる方向からホステスに光を当てた。松田は、生計を立てるための手段としての一面や、やりがいに着目し、参与観察を通じてエスノグラフィーを著した。松田の研究は、ホステスを脱被害者化し、専門職として位置付けることで、ホステスの語りを特権化されたものとして提示したということもできるだろう。こうした研究は、スティグマを負わされてきたホステスへの見方を変えることにも繋がり有意義である。しかし、ホステスの語りを「ホステスという専門職」につく女性の

¹⁸ ゴッフマン（Goffman, 1963/1970）によると、スティグマとは「適合的と思われるカテゴリー所属の人々と異なっていることを示す属性、それも望ましくない種類の属性」（p. 15）のことを指し、このような属性を持っていることで「極端な場合はまったく悪人であるとか、危険人物であるとか、無能である」ことが立証され、「汚れた卑小な人に貶められる」（p. 15）、そのような属性のことで定義されている。本稿でも、この定義を用いる。

語りとして解釈することで、その他の解釈の可能性を奪っているとも言える。また、参与観察やインタビューにおいては、研究者とホステスの間の権力関係への配慮が重要であろう。ホステスが、スティグマへの負い目から、スティグマから自分を遠ざけるように語っている可能性や、研究者の前では語れないことがあった可能性を考慮する必要があるからである。

以上のように、先行研究は、戦略的にホステスに対して様々な方向から光を当てることで、スティグマを解決するための糸口を探り、これまで認識されることのなかったホステスという職業の新しい側面を明らかにしようとしてきたと言える。しかし、その光をいくら増やしたところで、光の当たらない場所が完全に無くなることはないだろう。

また、ホステスらの、ホステスとしての「語り」は、メディア以外の場所においても、様々な場所（例えば、ホステスに対するインタビュー調査や、アンケート、参与観察）で散見され、それはしばしば重要な資料として研究者によって聞かれ／読まれ、分析・解釈されてきた。その際、研究者自身が、ホステスというシニフィアンに対して、無意識に、ステレオタイプのホステス像や、ホステスに付随するスティグマなどのシニフィエを読み込んでいることを否定することはできないだろう。

その一方で、ホステスとして「語らない」ホステスらに対して、「語る」ホステスの「語り」が押しつけられてきてはいないか。つまり、先行研究が提示してきたホステス像も、「語る」ホステスらと共に、ホステスのステレオタイプ化に貢献してきたのではないだろうか。ホステスによるホステス語りを根拠に、新しいホステスのステレオタイプが作り上げられると同時に、「語らない」ホステスらもそのステレオタイプのもとに一方的に解釈されてきたことに問題があると著者は考えている。

著者はこのような問題意識にたち、ホステスの語りの果たした機能・効果に着目し、ステレオタイプ化されたホステス像が言説の結果として構築され、強化されていく様子を明らかにすることが必要であると考えている¹⁹。したがって本稿

¹⁹ ホステスを言説の結果として見るという点において、著者と問題意識を共有する研究として宮庄(2013)がある。宮庄は、ホステスの始祖とされる女給をめぐる言説から、系譜学的に言説分析を行った。そして、大正時代、許される限りの女性の社会的自立

は、ホステスという職業や、ホステスという職業に就く女性の実態、またホステスが何を語っているのかを明らかにすることを目的としない。そうではなく、ナラトロジーの知見から、元ホステスのホステスについての「語り」の分析を行い、元ホステス作家が、ホステスについて文学テキストにおいていかに語り、それを読者がいかに受容したのかを明らかにすることで、ステレオタイプ化されたホステス像が構築されていく様を炙り出していく。

3 ホステスを代表／表象しうるか

本節では、ホステスとして、ホステスについて「語る」ホステスが、「語らない」ホステスを含む全てのホステスを代表／表象 (represent) しうるかについて考察を試みる。ホステスという職業に付与されたスティグマが、代表／表象の問題にどのような影響を与えているかを中心に議論を進めたい。

前節において言及したように、ホステスは、スティグマ化された仕事である。松田(2004)は、ホステスという用語についての説明の中で、「『ホステス』と聞くと何を思い浮かべるだろうか？」(p. 108)との問いを提示し、こう自答している。

かつての女給がそうであったように、「色気」を売り物にするホステスもこのような「不貞」、「淫ら」、あるいは「売春」といった「エロ」と地続きのイメージからは逃れられないのである。(pp. 108-109)

また、松田(2010)は、ホステスの働くフィールドを指す「水商売」という語に関しても、「何のかんのいっても、やっぱり水商売なんですよね」「しよせん、水商売じゃないか」(p. 133)という雑誌AERAの記事からの抜粋を引用しつつ「水商売は「まともでない」仕事・商売イメージ」(p. 133)であることを指摘している。ホステスには、こうした「エロ」や「まともでない」といったスティグマが付与され、性的な客体として消費されてきたという一面がある。このようなスティグマが、ホステスの語りにもどのような影響を与えるか、ゴッフマンのスティ

の可能性の一端を担ってきたという、ホステスが社会において果たした役割の一面を明らかにしている。

グマ論を参照し考えてみたい。ゴッフマン（1963/1970）は、スティグマを、見ただけでわかるものと、見ただけではわからないものに分類し、見ただけではわからないスティグマに関して、「まだ暴露されていないが、〔暴露されれば〕信頼を失うことになる自己についての情報の管理／操作」（p. 81）が行われることに言及した。ホステスの職に就いていることは、職場を離れば、見ただけでわかるスティグマではない。しかし、ホステスだと認識されるや否や、「エロ」や「まともでない」といったスティグマを、職場以外の場所でも付与されるのである。このようなスティグマから逃れるために、自分がホステスであるということを隠している人も少なくない。メディアにおいても、また巷においても、ホステスとして、ホステスを語るのは、ごく一部の限られた人である。では、こうした一部の語るホステスらは、その他の語らないホステスらを代表／表象することができるのだろうか？語るホステスらは、自由に語る事ができたのだろうか？また、その語りはいかに聞かれ／読まれるのだろうか？

彼女らがホステスとして語る時、聞き手／受け手は、そこに「ホステスの語り」を聞く／読む。そのような関心のもとに聞かれ／読まれるとき、語りは聞き手／受け手からの期待・関心に大きく引きずられることになる。「語る」という行為は、コミュニケーションである以上、聞き手／受け手の存在を全く無視することはできないからである。ゴッフマン（1963/1970）は、スティグマを付与されている人の行動準則が、「単に他人をどう扱うかを指示するばかりでなく、自己に関する適切な態度とはどういうものかについての処方をも呈示している」（p. 187）ことを明示し、この行動準則は社会において公然と支持されていることを示唆した。ホステスとして語る時、ホステスは、付与されたスティグマのために、ある行動準則に従うこととなる。つまり、ホステスは、ホステスに期待される「エロ」や「まともでない」といったスティグマに沿って、何かしらの形でそれに応答し、語っていると考えられる。

では、ホステスらの語りは、いかに聞かれ／読まれるのだろうか？ここに一つの例を提示したい。2014年、日本テレビにおいて、ホステスのアルバイト経験を理由にアナウンサーの内定が取り消されたというニュースが大々的に報道された。その後、裁判所での協議によって和解が成立し入社した彼女は、アナウンサーとしてメディアに姿を表した。彼女は、あるワイドショー番組に出演した

際、その番組の男性司会者がアナウンス部で高く評価されており、番組で多くのことを学びたいと思っている、といった旨の発言をするが、男性司会者は「夜の商売やりすぎじゃないの？」と返答し、彼女の発言をリップサービスとして受け止めている。彼女の発言は「日テレ笹崎里菜アナ“水商売臭”払拭は不可！」とネットで話題にもなった。この時、ホステス／元ホステスの語りは、スティグマ化された職業の経験者の語りとして解釈されている。もとより彼女は、元ホステスとしてテレビ・メディアに出演したわけではない。しかし、聞き手／受け手が、語り手／送り手をホステス・元ホステスとして認識した際、その語りの解釈には、ホステスに付与されるスティグマが大きく影響するのである。

では、ホステスに付与されたスティグマは、語るホステスの代表／表象に、どのように影響しているだろうか。このことを明らかにするために、スピヴァクのサバルタン理論を援用したい。スピヴァクは、知識人とサバルタンの間の関係に着目し、代表／表象という二つの過程の中で生まれる「知の暴力」の作用について警告している (Spivak, 1988/1998, p. 30)。代表という実践は、代表される者を再現＝表象する。しかし、そこに現れるのは、代表／表象という実践によって、遡及的に存在していたかのようにみえる者、代表／表象される本質を持つかのようにみえる統一体である。スピヴァク (1996/1999) は、サバルタンの発話の場における代表／表象の不可能性について以下のように論じている。

私たちが純粋なサバルタンを目にすることはありません。サバルタン性という概念自体の中に、語ることのないこと、という性質があることになりま
す。(p. 81)

以上のスピヴァクのサバルタン論を、語るホステスと、語らないホステスの関係に敷衍すると、次のことが言える。つまり、一部のホステスが、ホステスを代表して語ることで、そこにホステスが再現＝表象され、遡及的にそのように語られる「ホステス」が存在するかのようにみえてしまうが、しかし、そのようなオリジナルな統一体は存在しない。そう見えてしまうことこそが「知の暴力」の作用なのである。そもそも、ホステスという職業に付与されたスティグマのために、自らを語らない大多数のホステスには、「語ることのないこと」というサバルタ

ン性が含まれており、その意味において、語るホステスは、語らないホステスを代表＝表象することはできないのである。さらに、語るホステスらに付与されるスティグマを考慮に入れると、事態はさらに深刻になる。一部の語るホステスらの語りは、聞き手／受け手の関心・期待や、スティグマ化された人への行動準則によって大きく制限されており、聞き手／受け手の解釈の場において、ホステスのもつスティグマが大きく影響し、解釈は歪められてしまう。

これまで、ホステスを代表／表象することの不可能性を論じてきたが、本稿で取り上げる元ホステス作家・室井佑月も、もちろんその例外ではない。室井は「作家」「エッセイスト」「タレント」として多くの「語り」の場を持っている。室井は、そのあらゆる場において、ホステスをしていたという自身の過去の経験を語り続けてきた。それは、元ホステスの語りとして読まれ／聞かれることを望み、ホステスを囲う権力関係の中に自ら飛び込んでいると言えるだろう。ホステスを代表／表象することのできない室井は、いかに元ホステスとして、ホステスを語るのだろうか。次節では、室井の語りを分析する。

4 『ドラゴンフライ』においてホステスをいかに語るか

本節では、ホステスを代表／表象しない元ホステス作家・室井佑月が、『ドラゴンフライ』においていかにホステスを語ったのかを、テキスト分析によって明らかにしたい。ここで簡単に室井の経歴を確認する。室井佑月は、1997年に『クレセント』で、「小説新潮」主催第一回「読者による『性の小説』」に入選し作家としてデビューする。『ドラゴンフライ』は、『小説すばる』1999年4月号から10月号まで7回に渡って連載され、2001年に発刊された室井の初の長編作であり、女性主人公マキが語る一人称の小説である。失恋をきっかけに、それまでのOLの仕事を辞めて、銀座でリュウという源氏名で働くことを決めた主人公のマキが、一人前の銀座のホステスへと成長していくまでが書かれている。本節では、はじめに、テキスト中のホステスへの言及、ホステスらの行動や発言に着目し、ホステスがいかに語られているのかを明らかにしたい。次に、マキのホステスという職業の捉え方の変化を追っていく。

最初に着目するのは、テキスト中のホステスに関する語りである。OLであったマキは、二股をかけられた末の失恋をきっかけに、復讐心から元恋人の殺害の

ために必要なお金について妄想する。そしてマキは、同僚・サワコにどうしたらお金を手に入れることができるかと相談する。サワコは「一緒に銀座の女にもなる？」と述べ、「儲かるの？」と尋ねるマキに「ものすごく。らしいよ」と答えている (p. 16)。ここでマキは、「ものすごく」「儲かる」仕事として「銀座の女」(同) という仕事を知る。その後マキは、銀座で偶然出会ったホステス・ミネコの働くホステスクラブへと面接に行き、日当三万円という約束で採用される。そこでは「三万円。なんという高級なのだろう。瞬きが止まらない」(p. 27) と、高額な給料に興奮するマキの様子が書かれている。このように、ホステスは高額な給料をもらう仕事であることが繰り返し書かれており、それは主人公がホステスという仕事に就く理由ともなっている。テキストの中で、ホステスという職業に就くことは、お金を稼ぎたいという目的に還元されている。しかし、いかなる仕事も、仕事である以上当然お金を稼ぐことをその目的に含むはずである。ホステスとして働く理由を、お金を稼ぐという目的に特化して還元することで、ホステスを貪婪な者、または拝金主義者としてみるホステスのステレオタイプが書かれていると言えるだろう。ホステスが、このように書かれることで、ホステスという仕事のやりがいや社会貢献など、仕事の他の目的は後景化され、ホステスとして働く女性の貪婪で拝金主義的な思考が強調される。

次にホステスを、性的なふしだらさに還元する語りに着目したい。物語の序盤において、ホステス・サユリは、新人ホステス・マキに対して「リュウちゃんも、おっぱい入れたら。もっと人気が出るから」とアドバイスをし、「触らせる必要はないのよ」と言いつつも、続けて「そういう子もいるけど。ほら、右端のあの子」と、向かいのテーブルにいるホステスを指差し「総入れ歯。意味わかる？」と語る (p. 11)。「総入れ歯」とは、男性の性的快楽の増進のために、女性がより都合の良い形に自らの身体を整形することを意味している。このような語りによって、ホステスとお客の間に、性的関係が存在することが間接的に匂わされている。

物語の中盤では、店の陰謀によって借金を背負わされた先輩ホステス・ミネコが、借金を返すために銀座から去ることになる。以下は、マキが耳にした、ホステスが借金をどのように返済するのかに関する噂である。

借金を抱えたクラブのホステスが、金を稼ぐために風俗関係の店に行くという話を聞いたことがある。東京の、ではない。プライドの高い彼女たちは、わざわざ馴染みの客に出会うことのない地方へ行くのだ。(p. 135)

ここでは、借金を抱えたホステスは、返済のために風俗関係の店に勤めることがあるという噂が提示される。これは本テキストにおいて確実な情報として語られてはいない。しかし、この噂によって、ホステスは性が常に身近にあり、いざという時には恋愛以外の場において、性的な関係を結ぶことを厭わない者、つまり性的にふしだらな者と見る視点が提示されている。

こうした、ホステスが自分の身体を整形してまでも男性の快樂のために尽くす、ホステスはお金のためには性的な関係を結ぶことをも厭わないという言説は、ホステスに付与される「エロ」というスティグマとも一致している。

マキは、ホステスとして働き始めた後、店のボーイ²⁰であるスガヌマと性的な関係を持つ。その際、マキは以下のように述べている。

ペニスは一気にあたしを貫いた。あたしの内側が、ペニスを必死で掴んでるのがわかる。まるでべつの生き物のようだ。真っ赤な口紅を塗ったホステスが、あたしのあそこに貼りついているのを想像した。(p. 106)

ここでは、スガヌマと性的な関係を結ぶマキの下半身が、ホステスと重ねて想像される。ホステスとは職業であるが、マキにとってホステスとは、性的な存在なのである。以上のように、ホステスは性的なふしだらさと結び付けられている。

また、本テキスト中のホステスの世界では、度々暴力沙汰の喧嘩・騒動がおきている。本テキストは、「お客がうつむいた瞬間、頬を張られた。タバコをくわえたのを見逃して、自分で火をつけさせてしまったのだ。」(p. 3) という、先輩ホステス・ミネコが新人ホステスであったマキの失敗に対して、頬を張る場面から始まる。入店後、ミネコの指導の下で、新人ホステスとして客からの人

²⁰ ボーイとは、キャバクラ・ホストクラブ・高級クラブなどにおいて主に、給仕業務を行う者を指す。しかし、地方や業種によってボーイが行うとされる細かい業務内容は異なる。

気を獲得したマキは、ホステス・レイナから人気を嫉妬され、嫌がらせを受ける。マキは、接客中のレイナに対して「戻ってくるのを待って、ぶん殴ってやる」(p. 67) と呟くが、ミネコから「あたしだったら、即、殴ってやるけどね」(p. 68) とアドバイスを受け、営業中にも関わらずその場でレイナを店の外に呼び出し殴る。その際、黒服²¹・ドウメキも「では、ごぞんぶんに」(p. 69) とマキの暴力行為を止めることはしない。さらに、店に騙されて多額の借金を背負ったミネコは、借金の返済のため店を訪れた際に「ミネコさんがママを刺して、ママがクリスタルボトルでミネコさんを殴りました」(p. 181) と、流血沙汰の事件を起こしている。本テキストにおいて、ホステスの世界で起きた問題は暴力で解決される。通常、社会において問題を暴力で解決することは、非理性的な行為であり、時に犯罪行為とさえみなされるが、本テキストで書かれるホステスの世界においては、非理性的であることこそが正しいこと、として語られている。

これまで見てきたように、本テキストにおいて、ホステスはお金・性・暴力と結び付けられ語られてきた。本来、ホステスとは職業であり、職業とその職業に就いた人物の性質とは切り離されているはずである。しかし、テキスト中のホステスらは遍く、貪婪な拝金主義、性的なふしだらさ、問題を暴力で解決するという非理性的な思考といった性質を持つ人として書かれている。これは、ホステスの経験がある者に対して、スティグマを付与する言説とも重なり合う。つまり、このテキストではステレオタイプのホステス像が書かれていると言える。

ここからは、ホステスという職業に就いた人物が、いかにスティグマ化されているのかを確認しつつ、マキのホステスという職業の捉え方の変化を追い、ホステスになることが、如何に書かれているのかを分析していく。ホステスクラブで働き出した当初は、マキはホステスについて「おかしい。あたしも、ミネコさんも、銀座のホステスそのものが」(p. 53) と述べている。その後、マキは「明日から店に出勤しなければ、簡単にあたしは普通の女に戻れる」(p. 60) と述べ、ここに「おかしい」ホステスと「普通の女」が二項対立的に書かれる。このように書かれることで、ホステスは「普通」から遠ざけられ、「おかしい」者、普通でない女としてスティグマ化されることとなる。

²¹ 黒服とは、キャバクラ・ホストクラブ・高級クラブなどで雑務を行う者を指す。

次に、「おかしい」ホステスと、「普通の女」が象徴的に対比されるシーンに着目する。マキがホステスという職業に就いた後、高級ブティックで、ウェディングドレスの試着に来ていた元同僚サワコと遭遇する場面である。サワコが入店する前に、マキは青いドレスを試着し「これを着て、クラブのフロアを優雅に泳ぎたい」(p. 157)と心を躍らせていた。サワコが店に入ってくるとマキは、サワコのことを「まるで世の中の脇役として生まれてきたような人たち」(同)と嘲弄している。ところが、サワコがマキに結婚を報告し、ウェディングドレスを試着した姿を見せると、途端にサワコは輝き出し、マキはそれまでの自信を失っていく。マキは「彼女が主演であたしは脇役だ」(p. 162)と感じ、黙ってその場を去る。それまで、サワコのことを「脇役」と嘲弄していたマキは、ウェディングドレス姿のサワコの横で「脇役」となり、同時に「孤独だ」(p. 163)「寂しかった」(p. 164)と感じ涙を流している。

このマキの決定的な変化は、ウェディングドレスが象徴する結婚と関連している。結婚とは、私生活における出来事であり職業とは関係がない。それにも関わらず結婚という出来事を前にして、ホステスであることを理由に、マキは自分自身を「脇役」だと感じている。またサワコと対照的に、マキは「孤独」「寂しい」と感じていることから、本テキストにおいて、ホステスは、私生活における結婚というロマンティック・ラブ・イデオロギーにおける女の幸せを得られないものとして、スティグマ化されていることがわかる。この出来事後、マキは売上第一位となるが、突然ホステスという仕事を「莫迦みたいだ」(p. 173)と感じ、「田舎に帰ろうと思った」(同)と、ホステスをやめて「普通の女」に戻ることを決断している。

次に、その後マキが決断を翻し、ホステスに付与されるスティグマを背負う覚悟を決める様子を見ていきたい。マキはホステスを辞めると決断し「会長にはお世話になった。会長が望むなら一度ぐらい寝てもいい」(同)という気持ちで、客であるヤクザの会長とホテルへ向かった。マキは会長と重なりながら、自分自身に「この身体はリュウの身体」(p. 174)と言い聞かせている。しかしマキは嫌悪感に耐えることができず、ここで会長とマキは、性的な関係を結ばないままである。会長の体の下から抜け出したマキは、その場で急用を思い出したかのような素振りでは黒服・ドゥメキに電話をかける。その電話でミネコが、借金返済の

ため店に来ていることを知ったマキは、会長と共にホテルから店へと向かい、そこでミネコとママの流血沙汰の事件を目撃する。マキはその騒動について「いくつもの髪の毛の束の先に、いくつもの雫の玉。冷たい光を放ってる。涙みたい。たくさんのホステスの涙みたい。綺麗」(p. 180)と表現し、二人の姿に陶醉している。着目するのは、騒動の後に再度2人で戻ったホテルでの場面である。「あたしは会長とホテルに戻った。戻りたい、といったのはあたしだった。部屋に入るなり、あたしは裸になった。会長は銀座の、“Club Elise”のリユウという女の子が欲しいといった。それはあたしだ。あたしのことだ」(p. 182)と述べ、会長と性的な関係を結ぶ。そして、マキは引退という決断を翻し、銀座で生きていくことを決める。マキは、ミネコとママの流血沙汰の事件を見たときに、ミネコとママがスティグマを背負い、命懸けでホステスとして生きる姿に「綺麗だった」(p. 181)と、ホステスの美学を感じている。つまり、スティグマを背負ってでもホステスとして生きる覚悟に陶醉したのだと考えられる。マキは、この事件を通じてホステスとして生きる覚悟を決める。マキがホステスとして生きることを決断する以前は、会長から翡翠の指輪をプレゼントと言われても「こんなものしてたら、邪魔で普通に生活できませんし」(p. 34)と断っており、会長と性的な関係を持つことには嫌悪感を感じていた。しかし、ホステスとして生きる覚悟を決めてからは、会長に「翡翠の指輪をプレゼントしてください」(p. 183)と自ら頼み、また会長との性的関係においては「快感に身をゆだねた」(同)と、快感を感じ、その後も、ドウメキとも気晴らしの性的な関係を結ぶなど、貪婪な拝金主義、性的ふしだらさというステレオタイプのホステスの性質を獲得している。

本テキストにおいて、ホステスになるということは「普通でないもの」、女の幸せを得られないもの、というスティグマを背負い生きていく覚悟のことであり、その覚悟は同時に、拝金主義・性的ふしだらさ・非理性といったステレオタイプのホステスの性質の獲得を意味していると言えるだろう。本テキストにおける真のホステスとは、単なる職業ではなく、このようなステレオタイプのホステス像に自己同一化した者の事を指すのである。

5 ホステスはいかに読まれたか

ではこのテキストは読者によっていかに読まれたのだろうか？ホステスの世界は、大多数の読者にとって未知の世界である。ホステスクラブに出入りするのには、一般的にホステスと黒服、そして客であり、ホステスでない女性や、客でない男性が立ち入ることは稀にしかない。また、マスメディアや小説など様々な媒体からの情報によって、きらびやかな店内、華やかな女性の姿、立ち並ぶ数々のボトル、高額な料金など断片的な情報はよく知られているものの、ホステスクラブにおいて実際には何が行われているのかを知ることはあまりなく、その実状は想像されるだけである。また、ホステスクラブの客であっても、ホステスが仕事を離れた時の姿を知ることは減多にない。客が知っているのは、ホステスらがホステスとして提供する姿に限られている。ホステスクラブは、そういった意味において未知の世界である。作家が元ホステスであると語ることは、読者の知らないホステスの世界を「知っている」者であると語ることである。よってそれは「知という権力」を持っていることを示す符号となる。室井は度々元ホステスであると語り、小説の帯の作家紹介においても元ホステスと書かれてきた。元ホステスという肩書きが読者の解釈においていかに作用するかを考えるにあたって、ここでバルトの作者論に対する応答としてのフーコーの議論を参照する。

バルト（1966/1979）はその著作『物語の構造分析』の中で、エクリチュールはあらゆる起源を破壊すると述べ、「作者の死」を宣言した（p.79）。つまり、作者は意味の根源たりえず、エクリチュールの意味は、読者の中に生成されると述べるのである。このバルトの「作者の死」という概念への反論として、フーコー（1969/1990）は『作者とは何か？』の中で、「機能としての作者」が依然として存在すると論じている（p.39）。そして複数のテキストがある同一の名前の下に置かれることに関して、以下のように述べた。

ある言説がある作者名を載いているという事実、「これは誰それによって書かれた」とか「誰それの作者だ」と言いうる事実、この言説が日常の無差別な言葉、消え去り、浮遊し、通過してしまう言葉、即座に消費されてしまう言葉ではなく、一定の仕方で受け止められ、一定の文化内で一定の身分を与えられてしかるべき言葉だということを示しているのです。（p.35）

作者に関する情報は、読者によって「作者名」を目印に分類され、そこに現実の作者とは異なる「機能としての作者」が構築されていく。室井に関していえば、テレビ・メディアでの発言や、映像、様々な媒体における連載や小説以外のエッセイ本などにおいて、読者は室井に関する様々な情報を入手することができる。その中で、元ホステスであるという情報も「機能としての作者」を作り上げていく一つのファクターとなる。

日頃より、室井は自分が元ホステスであると語ってきた。デビュー作『クレセント』を含む作品集『熱帯植物園』発刊前に、文芸雑誌『波』（室井、1998）のインタビュー記事において、室井は「モデル、レースクイーン、銀座のクラブホステス」（p. 55）をしていたと語り、また『ドラゴンフライ』の文庫本の袖における著者紹介でも「モデル、女優、銀座のクラブホステスなど様々な職業を経て、97年『クレセント』を発表して作家デビュー」とその経歴が紹介されるなど、元ホステスという経歴は度々読者に知らされてきた。その上で、元ホステスという肩書きが読者の本テキストの解釈においていかに作用するかというはじめの問いに戻りたい。読者は、室井が元ホステスであるという情報と室井が書いたテキストを、読者の中に構築される「機能としての作者」の元に帰属させる。元ホステスという肩書きは、「機能としての作者」に「知という権力」を与え、それは室井が語るホステスに真正性を保証する。室井が語るホステスは、読者の中でこのように構築されていく。

では、『ドラゴンフライ』は読者にいかに読まれたのか。以下は、読後レビュー投稿サイト読書メーターの感想・レビュー、Amazon.co.jpにおける『ドラゴンフライ』のレビューからの抜粋である。

ちょっと不完全燃焼だったけど、迫力とリアリティと華やかさがあって好き。(れもん, n.d., 読書メーター)

著者が元ホステスだったこともあり、その描写にはリアリティーがあり、「こんな世界もあるんだな」と感心してしまった。(paon, December 11, 2002, Amazon review)

この小説は「銀座の女」の話である。一生私には縁がないだろうし、全く知らなかった銀座の水商売の世界の一旦を垣間見れ、とっても勉強になる一冊。室井さんは昔、銀座でホステスをしていた経験があるので、この小説の中でどこまでが実体験なのか、考えるのも楽しい。(Tochitli, March 25, 2005, Amazon review)

テレビのおちゃらけコメンテーターだと思っていたらば、こんなちゃんとした小説が掛けるんですね。とてもリアルです。(晴れ晴れ男, January 3, 2009, Amazon review)

銀座で働くお姐さんたちを書いた作品。描写がリアルで友達から身の上話を聞いているようだし、銀座の裏ののぞき見するような感じもあって、サクサクと読める。(nice_sheep, January 5, 2012, 読書メーター)

ホステスをされていた経験もあって銀座ホステスの事がリアルに描かれています。(ぷっくん, August 23, 2015, 読書メーター)

銀座の高級クラブのホステス、リュウの生き様を描いた作品です。流石に経験に裏打ちされた描写はリアル感に溢れています！(hitokoto, December 21, 2015, 読書メーター)

読者は、『ドラゴンフライ』のホステス語りに「リアリティ」を感じており、「リアル」なホステスを知ることができたという感想を述べている。リアリティを感じるとは、テキストが虚構であるにも関わらず、現実味を感じられるということである。現実味を感じるためには、現実を知らなくてはならない。しかし多くの読者にとって、ホステスの世界は未知の世界である。未知であるにも関わらず、読者がリアリティを感じることができるのは、ホステスをステイグマ化する言説と、断片的な情報から形作られたステレオタイプのホステス像を持っているからである。

室井が語ったホステスは、既に読者の中にあるステレオタイプのホステス像と

一致しており、またホステスをスティグマ化する言説とも一致している。読者が感じるリアリティとは読者の中のステレオタイプの、スティグマ化されたステレオタイプのホステス像と、テキストの中のホステス語りの一致であると言える。このことから、スティグマ化されたステレオタイプのホステスに関する室井の語りが、読者の解釈にいかにか作用しているのかわかる。読者の感じる「リアル」は、読者の中のスティグマ化されたステレオタイプのホステス像と室井の語ったホステス像の一致、そして元ホステスという肩書きによる真正性の保証という両方の作用によって捏造されていく。そしてそこに読者はホステスの「リアル」を知り得たという快樂を見出しているといえよう。

読者の「リアル」なホステスを知りたいという欲望と元ホステス作家の語りは共謀して読者の中にホステスの「リアル」を作り上げてく。その影に「語らない」ホステスの沈黙がある。

6 終わりに

以上のような意味から、元ホステス作家・室井は、ホステスを代表／表象することはできない。しかし室井は繰り返し、元ホステスと自らを語り、元ホステスの語りへの期待を逆手にとって、ホステスを囲う権力関係に自ら取り込まれてゆく。そして、読者／聴者の期待に応えて書き／語ることによって、室井は現在の地位を築いてきた。そして読者は室井とともにホステスの「リアル」を捏造してゆく。室井は元ホステスとして饒舌に語り続けている。2019年7月15日に行われた講演会²²においても、ホステス時代に客のお見舞いの際、病室で裸になったエピソードが一番最初に披露され、聴者の中に「リアル」なホステス＝室井を構築し、「リアル」を知り得たという快樂を与えている。室井は、『ドラゴンフライ』を書いた後も、このように読者／聴者の中に「リアル」を捏造しながら、作家としてタレントとして一応の成功を取めてきた。その影には聞かれることのない「語らない」ホステスの沈黙があり、「語れ」ないホステスがいる。私たち読者／聴者は、語らないホステスにどのように語りかけることができるだろうか。

²² 著者は、2019年7月15日2限、南山高等・中学校女子部北校舎1階ライオネスホールにて行われた「愛知サマーセミナー2019」における室井佑月の講演会「室井佑月に“聞きたい放題”」に参加した。

ここで再度スピヴァクの議論を取り上げ考えてみたい。スピヴァク（1988/1998）は、こう述べている。

サバルタン女性という歴史的に沈黙させられてきた主体に（耳を傾けたり、代わって語るというよりは）語りかけるすべを学び知ろうと務める中で、ポストコロニアルの知識人は自ら学び知った女性であることの特権をわざと「忘れ去ってみる（unlearn）」（p. 74）

このようにスピヴァクは、沈黙させられてきたサバルタンの主体に対して、知識人が変わらなくてははいけないと繰り返し述べている。スピヴァクが言う通りそこに有用な処方はないかもしれない。しかしまず、代表／表象の暴力性に目を向け、そしてホステスを代表／表象しない、ホステスを語るテキスト／言説の影に、聞かれないホステスの声があることを思い出すことが必要なのではないか。

ホステスの語りの場は、未だ強固なホステスを囲う権力関係の中にある。しかし、社会構造は可変性を持ち、抑圧される者がいつまでも抑圧され続けるわけではないことも、ここに明記したい。また、ホステスらが広げる「語り」の場の中における、ステレオタイプのホステス像からの「ずらし」の戦略の中にも、権力関係の変化の兆しを見つけることができる可能性はある。

今後も、ホステスの「語り」とその受容に関する分析を続け、ホステスの語れなさ、その周りの権力関係を明らかにすることで、格差、排除、分断が跋扈する現代社会において、スティグマ化された者が語るという行為の持つ意味、政治性の研究へ寄与していきたい。

Acknowledgments

本稿の執筆にあたり、終始熱心なご指導を賜りました名古屋大学大学院人文学研究科の松下千雅子教授に、衷心より感謝の意を表します。また、2名の匿名の査読者より、重要かつ有益なご指摘をいただきました。拙稿の理解を広げるための貴重なご進言をいただきましたことに、心より御礼を申し上げます。英文要旨の作成に当たっては、名古屋大学大学院人文学研究科博士前期課程Meagan Finlay氏から助言を受けました。記して感謝の意を表します。

References

- 稼ぐために。そして、売れ続けるために。～銀座最年少ママの奮戦記～. (n.d.). Retrieved November 27, 2019, from <https://www.nikkei4946.com/seminar/seminar.aspx?ID=3113>
- 上瀬由美子. (2011). 「性の商品化と職業ステイグマ——キャバクラに対する成人男女の意識調査から——」. 『GEMC journal グローバル時代の男女共同参画と多文化共生』, 5, 32-46.
- 川畑智子. (1995). 「素人ホステスのアイデンティティ形成の過程とその意味」. 『社会学論考』, 16, 27-60.
- 川畑智子. (1998). 「素人ホステスから見た「女らしさ」のワナ」. 『セクシュアリティをめぐって』 東京: 新水社.
- 川畑智子. (2001). 「戦略としての「媚態」とそのパラドックス——クラブホステスの研究から」. 『社会学論考』, 22, 57-79.
- 銀座ママに学ぶ経営力、人間力. (n.d.). Retrieved August 20, 2019, from <https://www.miyazaki-u.ac.jp/newsrelease/event-info/116-1.html>
- 斉藤里恵. (2009). 『筆談ホステス』 東京: 光文社.
- 白坂亜紀. (2017). 『銀座の流儀「クラブ稲葉」ママの心得帖』 東京: 時事通信社.
- 蝶々. (n.d.). 「河出書房新社」. Retrieved August 24, 2019, from http://www.kawade.co.jp/np/search_result.html?writer_id=13608
- 蝶々. (2004). 『銀座ホステス作家の実践テク147 小悪魔な女になる方法』 東京: 大和出版.
- 2時間で2回目につながる恋愛会話力UP! 講座. (n.d.). Retrieved August 20, 2019, from <http://www.tc-counseling.com/category/1845342.html>
- 日テレ笹崎里菜アナ「水商売臭”払拭は不可! 加藤浩次の強烈なひと言に「ごまあ!」の声殺到」. 『excite ニュース』. Retrieved August 19, 2019, from https://www.excite.co.jp/news/article/Cyzo_201810_post_178612/
- 福富太郎. (1994). 『昭和キャバレー秘史』 東京: 河出書房新社.
- 『「ビジネス書」最新ベストセラーランキング』 『東京経済ONLINE』. Retrieved August 19, 2019, from <https://toyokeizai.net/articles/-/217997?page=2>
- 松田さおり. (2004). 「ホステス」. 『性の用語集』 東京: 講談社.
- 松田さおり. (2006a). 「現代日本におけるサービス産業に従事する人々と『仕事』の人類学的研究——東京・銀座の遊興飲食店で働くホステスの事例に基づく分析——」. 名古屋大学大学院博士学位論文.
- 松田さおり. (2006b). 「ホステスの移動を考える」. 『現代風俗 移動の風俗「成り上がり」から「お遍路」まで』 東京: 新宿書房.
- 松田さおり. (2008). 「ホステスたちは、何を売る?」. 『性欲の文化史2』 東京: 講談社.
- 松田さおり. (2010). 「水商売」. 『性的なことば』 東京: 講談社.
- 宮庄麻記. (2013). 「近現代日本における「水商売」の系譜学と、水商売をめぐる言説の分析」. 『国際文化研究紀要』, 20, 383-411.
- 室井佑月. (1998). 「[インタビュー] 室井佑月 炎のイメージ」. 『波』 32(6), 54-56.
- 室井佑月. (2001). 『ドラゴンフライ』 東京: 集英社.
- 室井佑月. (2004). 『ドラゴンフライ』 東京: 集英社文庫.
- 元No.1ホステスが教える接客術・トーク術. (n.d.). Retrieved August 20, 2019, from <http://www.achievement-s.co.jp/seminar/seminar06.html>

- Allison, A. (1994). *Nightwork: Sexuality, Pleasure, and Corporate Masculinity in a Tokyo Hostess Club*, Chicago; London: University of Chicago Press.
- Barthes, R. (1979). 『物語の構造分析』(花輪光.Trans.) 東京: みすず書房 = (Original work published 1966) *L'analyse structurale du récit*. Paris: Éditions du Seuil.
- Bornoff, N. (1991). *Pink Samurai: The pursuit and politics of sex in japan*, London: Grafton.
- Foucault, M. (1990). 『作者とは何か?』(清水徹&豊崎光一.Trans) 東京: 哲学書房 = (Original work published 1969) *Qu'est-ce qu'un auteur?*. Paris: Honoré Champion.
- Goffman, E. (1970). 『ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』(石黒毅.Trans.) 東京: せりか書房. = (Original work published 1963) *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, New Jersey: Prentice-Hall.
- Kamise, M. (2013). Occupational Stigma and Coping Strategies of Women Engaged in the Commercial Sex Industry: A Study on the Perception of “Kyaba-Cula Hostesses” in Japan. *Sex Roles*, 69, 42-57.
- Spivak, G, C. (1998). 『サブアルタンは語るることができるか』(上村忠男.Trans). 東京: みすず書房. = (Original work published 1988). *Can the Subaltern Speak?*. Urbana; Chicago: University of Illinois Press.
- Spivak, G, C. (1999). 「サブアルタン・トーク」(吉原ゆかり.Trans.). In 『現代思想』27(8), 80-100. = (Original work published 1996). *Subaltern Talk: Interview with the Editors*. In *The Spivak Reader*. New York: Routledge.
- Morley, J, D. (1987). 『水商売からの眺め——日本人の生態観察』(横田恒.Trans.). 東京: サイマル出版会. = (Original work published 1985) *Pictures from the Water Trade: An Englishman in Japan*, London: Deutsch.
- Alan, R and O'Neill, W, J. (1962). *For Men with Yen: A Guide to the Japanese Hostess System*. Tokyo: The Wayward Press.

Abstract

Can the Hostess Speak?: “Ex-Hostess” Author Narratives and Its Readers’ Responses

Mitsuko OE

Since around 2000, hostesses have expanded opportunities to write and/or speak about hostesses. This has become a kind of social phenomenon. This paper focuses on the hostesses’ narratives about hostesses and considers the following two questions. Firstly, in the expanding opportunities of narratives by hostesses, can hostesses who talk about hostesses represent (“speak for”/“represent”) those who do not? This question is about representation. Secondly, how do readers/listeners respond to the narratives of hostesses by hostesses? This question is about readers’ responses. In order to answer these questions, this paper analyzes one of the novels written by “ex-hostess” Yuzuki Muroi, *Dragonfly* (1999), in which the protagonist comes to identify herself as a hostess.

Firstly, previous literature on hostesses is introduced, and its problems and significance are presented. Secondly, I consider the effects of the stigma attached to hostesses in regards to issues of representation. By employing Spivak’s subaltern theory, I argue that it is impossible for the hostesses who talk about hostesses to represent those who do not talk. Then, I examine how “ex-hostess” author Yuzuki Muroi narrated about hostesses in her novel *Dragonfly*. In this novel, hostesses are characterized as being greedy, slutty and irrational. These characteristics are in accordance with the stereotyped and socially stigmatized image of hostesses. The “real” hostess in this text is not merely the occupation but is also presented as a person who identifies with the stereotyped image of hostesses.

Finally, by employing Foucault’s author function theory, I study how readers responded to *Dragonfly*. Among the readers’ interpretations, I found

that the readers considered what was written in the novel to be the “reality” of the hostess world. The author’s identity as an “ex-hostess” guarantees the authenticity of the narrative of hostesses and convinced the readers of its reality.

In conclusion, the current study clarifies that the “real” hostess in the readers’ minds was fabricated in a consistent manner with Muroi’s narrative and the preexisting stereotyped image, due to Muroi’s identity as “ex-hostess” which guarantees its authenticity.

Keywords:

hostess, narrative, readers’ responses, subaltern, stigma

